

---

# 夜桜こんちえると!!

奏音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜桜こころひかるとー！ー！

### 【著者名】

Z3983Z

### 【作者名】

奏音

### 【あらすじ】

そこには、ここではない場所であり、ここではない世界。

5つのギルドにより治められる世界に唯一の、桜が咲き乱れる森。そんな森の中にある夜桜四重奏本部、桜館で起こるドタバタファンタジー。

同作者連載中スマ@と変わらないテキトーでグダグダなテンションの小説だよ！

## 温かい日常（前書き）

初めての人も、そうでない人もこんにちわ、奏音です。  
この作品は色々設定とかあるものの基本テキトーなテンションで進行して行くので、深く考えずに読んでくれると嬉しいです。  
ちなみに最初のほうのみ普通のファンタジー仕様

## 温かい日常

そこは、ここでない場所であり、ここでない世界。

5つのギルドがそれぞれの国を管理するという決定により大戦が終結したのが約100年前。

それぞれの国がそれぞれの特色を持ち、お互いに協力したために、剣と魔法のみが存在していた世界には、科学技術も誕生した。

人々は今の世界を平和だと誰もが信じているだろう。

だけど、そんな世界を見ても僕は、皆のようにそう思う事ができな  
い。

神様は、何もない空間からこの世界を作ったという言い伝えを聞いた事がある。

いわゆる神話というやつだ。そんな事を本気で信じるような人はまずどこぞやの宗教の人くらいしかいないと思うけど、何か願い事がある時に、人は決まって神様を頼る。

だけど、僕はいつも思う。神様ができることはどれほどの事なんだろうか。どれほどの力を持てば神様になれるのかと。

僕、クロム・スキルショットは神様代行の一人だ。神様代行というとなんかすこそうに聞こえるけど、僕には神様的なすごい力なんてものはない。確かに、少しくらい普通の人と違う力はあるけど、とても神様とは言い難い程度のものだ。

と、ここまでに「神様」という言葉を連呼しているために、きっと信用できない人もいるだろう。うん、僕も信じられない。何故なら、見た目、能力的には人間と大差ないから。

それに、神様代行と言っているが、実際は神子という。神の子供と書いてかみこ。立場的にわかりやすそうなので人に紹介する時はいつも代行と言っている。つと、話がずれた。神子、つまり神様の子供な僕なんだけど、実際はただ神様に拾われた、いわゆる養子とう、ただの人間だ。

自分で言つておきながらなんだけど、神様代行って、かなり誇張されてる気がする。だつて、ストレートに言えば神様に拾われた人間、だから。

そんな微妙な立場の僕だけど、正直今の生活には満足している。それは、桜館で一緒に暮らす個性豊かな仲間達が、温かくてとてもいい人達ばかりだから。

「お前なあ、人の部屋の前でなんつー顔してんだよ。気持ち悪

前言撤回させてほしい。ここにはこんな人ばかりだ。

「失礼だな。俺はお前よりは常識のある一般人だと自覚している」「な……なんで僕の考えてる事が……」「顔に書いてある」

苦笑ぎみに視線をそらした彼はクレイズ・L・ヘクターといつ。クレイズも僕と同じく神子であるけど、僕の方が先に拾われた…つまり、兄だ。

僕とクレイズは髪の色も目の色も違う。僕は銀髪に青い眼なのに對し、クレイズは茶髪に赤い眼。うん、正反対だ。でも僕等は2人とも長い髪を後ろでしばっている。これは数少ない共通点だ。ちなみにクレイズいわく、お前のアホ面を見ると氣分が悪くなる、だそうで、僕が近寄ると異常なまでに避けることがある。いや、結構あるかな。

「で、クレイズはこんなところで何をしているの？」

「おま…人の話聞いてたか?」ここ俺の部屋なんだが…」

いかにも「お前やつぱバカだろ」といたげな顔をして答えるクレイズ。というか、かなりうつとおしそうだ。僕より背が高い上に目つきが鋭く、どこぞやの不良みたいな見た目のクレイズだが、実はまったく怖くない。それどころかへタしているので今の僕がしているようによくいじられる。

「うん、知ってる。何処行つてたの?『デート?』

最高の笑顔で言つてみた結果、逃げられた。

これはきっとデートであつてるね。もう、照れ屋なんだからー。と、そんなことを思いながら笑顔を崩さずに全力で追いかけてくる僕を見て、こっちを向いているクレイズの顔が引きつったのがよく見えた。きっと追いつかれたらなんか色々とヤバそうなのを感じ取つたんだろう。しかし僕は全く速度を落とさずに走り続ける。我ながらどこにこんな体力があるんだろうかと驚く。

と、普段走つたこともないような速度で走つたため、曲がり角で突如目の前に現れた人物への対処ができなかつた。

「うわっ、危な…」

その声の主は僕と衝突事故をおこして転ぶだろ?と思つた。だが、その予想と裏腹に、僕だけが前方の廊下に吹っ飛んだ。どうやら、あっさりよけられてついでに足をひっかけられたらしい。そのまま大きな衝突音をたてて廊下にスライディングする僕。嗚呼、みじめだ。いつぞ冒頭の部分はまるつきり忘れて欲しい。こんな仲間は温かいとは言えない。

「あ、「めんよクロムー。反射的に足かけちつたぜー」

「シオンちゃん…その反射能力はどうかと思うよ」

「だから「めんつて。ほら、可愛い乙女がこんなに謝つてるんだぜー」

「乙女?そんなのどこにいるの?..」

「やっぱ死ね!..」

刺された。三角定規で頭刺された。転ばされた上にこの仕打ちって酷くない?そりやあ、ぼけた僕も悪いけどさ。

「でもさ、シオンちゃん。乙女とか言つても全体的に全然乙女じゃないよ」

「復活早つー」

先ほどの会話でお分かりだと思うけど、シオンちゃん…シオン・シヘクターは口調が男っぽい。その上クレイズの妹なのに髪が男のクレイズより短いし、ヘタレ度が少ないのでクレイズより目つきが鋭く見える。服装もどつちかと言えば男よりのため、桜館の仲間のなかにはシオンちゃんを男だと思っている人も少なくはない。僕は結構女の子っぽいって思うんだけどなー。

「とりあえず口調とか服装だけでもなんとか女の子っぽくしないと誤解がさらに広ま……て、そうだー僕今忙しいんだった！」

言つといてなんだけど、クレイズをただただ追いかけるという行為のどこが忙しいの内に入るのか不思議に思つたが、とりあえずシオンちゃんを置いて再び廊下を走り出す僕。

「はあ…女の子っぽくかあ」

クロムが去つた後で小ちへつぶやくシオン。だが、周りに誰もいため誰もそのつぶやきを聞くことはなかつた。

「はあっ…はあ…見失つた…。やつぱシオンちゃんと会話に時間かけすぎたか…」

数分後、気がつけばクレイズの姿は視界から消え失せていて、ようやく足を止めて息を落ち着かせる。いつのまにか桜館の外まで出て

きてしまったみたいだ。ずっと走りっぱなしで、すっかり息は上がっていたけど、どう辛い感じはしない。最近運動してなかつたからいいリフレッシュでもなったかな、なんてことを思いつつ、随分と離れてしまった桜館に向けてゆっくり歩き出す。

「やー、前方注意

「へ? ..... うわあつー!」

ふと、どこからか声がかけられた。聞き覚えのある声だつたけど、反射的に気の抜けた声をだしてしまい、そのまま何かを考えるより先に足元がすくわれ、空中で木にぶら下がつて網の中に入つたまま釣られる形となつた。  
誰だ、こんなところに罠を設置したのは。

「前方注意とちやんと言つただろ?。それくらい反応しin  
「できないからこいつなつてるんでしょ。全く、引きこもつーノートの  
くせになんて物作つてるの?」  
「誰が引きこもつーノートだ。ちやんと定期的に外には出でいn」

定期的に、とか言つてるあたりがすでに引きこもつじやないかと思つた。

「で、いい加減出してくれないかな? ローゼくん  
「無理だ。そこまで登れない」

さすがローゼくん。体力ないんだね。

とまあ、さつきから酷い事ばかり言つてるけど(事実だから仕方ない) 実はローゼくんつてすごいんだ。何がすごいかと言つと色々すごい。でもよくわからないから詳しい事は他の人に聞いて欲しい。それより、登れないってことは、何。これはまさか僕ずっとここに

釣られてくることになるのでは…。

「ちょっとローザくん。何せつげなく逃げようとしてるのかな？」  
「待つてろ、助けを呼んでくれ…よう」に努力するかもしれない  
「かもつて何なの！？せめて努力しようよ。僕ずっとこのままは嫌  
だよ！」

「慌てるな。ただの冗談だ。ユーモア」

ユーモア、じゃない。真面目な顔で言われると全く笑えない。とい  
うか「冗談に聞こえない」。

「じゃあ、元氣でな」  
「え、ちょ、マジで「行くの！？」え、このまま放置するつもりじゃな  
いよね！？」  
「……達者でな」

無視かい。バツチリ放置する気じゃないのかこれは  
僕の心中を知つてか知らずか　いや、絶対知つてだと思つけど　た  
まにチラチラこちらを見つめにやにやしてくる。なんて嫌なやつだ。  
て、待て、まじで行つちやうの。え、それも冗談じゃないの！？え、  
ちょっと…！

## 温かい日常（後書き）

なんか展開が早すぎる気がしたので書きくわえました。

## シオンの恋

「はあ… さすがにもう追つてこないか」

気持ちわるい笑顔をはりつけたままものすごいスピードで追いかけ  
てきた謎の生物、もとい俺の兄貴から逃げること20分弱。ふと、  
いつのまにか後ろの気配がなくなつたことに気づき立ち止まり、息  
を整える。何、20分も連續して走り続けられるものなのかなだと  
?そんなことを思うのならば一度生命の危機に直面してこい。これ  
が意外と走れる。

にしてもあれだけ館内を想像しく走り回ったにも関わらず、誰から  
も何の苦情もいわれなかつた。やはりあれだろつか。慣れ、という  
やつ。恐ろしいと思う。慣れる前に俺を助けるか原因を削除してほ  
しい。

「あれ、兄貴。追いかけっこは終わつたのかー?」

「ああ、シオンか。何故かいつのまにかいなくなつてたな。あのバ  
力何処行つたか知らないか?」

「確か俺が転ばせたあとは外の方に行つたと思つぜー」

さすが俺の妹。どうやら俺の知らないところで原因の削除を試みて  
くれたらしい。結果的に削除には失敗したようだが、方向感覚を一  
時的に失つてくれたのでよしとしよう。

「それより兄貴。ちょっと相談したい事があるんだけどいいかい?」

「もちろんだ。俺は実の妹であり、なおかつ命の恩人からの頼みを  
断るほどに恩知らずな男じやない。てか、それがなくてもシオンの  
相談ならいつでもある…恋愛事以外ならな」

一応一つだけ注意事項をいれておいたが大丈夫だろう。シオンは年頃の少女の割には恋愛事には疎いし、どっちかといつと興味なさそうに見える。大方、「俺が恋愛なんてすると思ったのかよー」みたいな事を言われるだろうと思つていたが、実際は違つた。違うとうより、真逆だ。さかさまであり、反対。

「え…」

「ん、どうした？」

シオンは、あきらかに動搖していた。返す言葉がないとばかりに表情が硬直している。困ったな。さつきの発言は冗談半分だったんだがまさか本当に恋愛事だとは…。あ、ちなみに残り半分は本気。俺にも彼女がないのに妹に先越されていい気分になれるか！そんな素性の知れない輩やからにうちの妹は渡しませんからね！

「あ、兄貴…どうしたんだよ、いきなり壁なんか殴つて…」

「筋トレ」

「……」

うわ、寒い。シオンが俺を見る目<sup>の温度があきらかに2~3度下がつ</sup>つていて。このままでは実の妹に変人として認識される目も遠くな  
いかもしない。

「まあ、さつきのは冗談だ」

「さつきのつてのはどこからその範囲なんだよー」

「約、全部…といったところか…」

「……」

さらに冷たい視線が襲ってきた。その視線はなんですか、俺を軽蔑してゐるんですか！

「…まあ、冗談ならいいや。で、相談なんだけど…」

「ああ、俺の答えられる範囲で真面目に本気で答えよつ」

急にシオンが真面目な顔になつたので俺も息を落ちつけて、これ以上微妙な発言は控えるように胸の内に刻み込んだ。どうにもさつきからキヤラがぶれているが、俺はどちらかと言うと真面目キヤラだ。さつきまでの妹への兄弟愛が暴走した結果であると言つておこう。よし、今なら何を言われても暴走することはないだろう。

「実は俺…好きな人ができたんだけど」

「お兄さんは絶対に認めませんっ！！」

暴走した。一秒も耐えられずに叫んでしまった。そしてそのままランアウエイ。つまり、渾身の全力ダッシュ。シオン曰くそれは、何も考えず、何も見ず、ただ体力の続く限り走り続ける俺の最上級の暴走。

「……俺、相談する人間違えたかな」

俺の姿が見えなくなつたところシオンはこんな事を言つていいたらしい。

遅まきながら自己紹介を。俺はクレイズ・L・ヘクター。神子、つまりクロムの言つところの神様代行である。だが、俺たちの役割は調律者（リンク）の管理と世界のバランスを保つこと。まあ、あのバカがそこまで心得ていいとは思い難い。

バランスを保つといつても何もそう難しいことではない。この世界にバランスを崩すなんらかの異変が生じた際に、うまくバランスがとれるように手を加える。それだけだ。俺たちは約100年ほど前からその仕事を任せられ、行っている。それが難しいと思うかもしれないが、そうでもない。神子である俺とクロムには、それをするのに適した能力がある。さらに今はこの桜館の夜桜四重奏がある。夜桜四重奏は、世界のバランスを保つために俺たちと共に活動する、ギルドというかユニオンというか、とにかくそういういた類の団体だ。彼らはほとんどが異形と呼ばれる異能力者なので、戦力としてはかなり頼りになる。

それともう一つ。調律者（リンク）の存在は俺たちの活動にとって大きい。調律者と神子はそれになつたその時から寿命はなく、ほとんど病氣にもかからないが、怪我によつて死ぬ可能性はある。

俺やクロムは能力で自衛することが充分可能だが、歴代の調律者達は皆、個々によつてそれぞれ全く別の能力を持つていたが、どれも自衛の能力が低い。たとえば、攻撃に特化したために防御が乏しく、一撃で死に至るような例もあるし、ただただ、異常なまでの強運という能力の調律者もいた。強運の奴は結構長く生きたが、少し前に死んでしまつた。そして、その2年ほど後、7代目の調律者になつたのが、水無神玲羅（みなかみれいら）。こいつの能力の詳細についてはよく知らないが、不死身に近い能力なのは確かだ。それは俺の体験からの事だが、ここでは語らないでおこう。色々と、グロイ。

まあ、そう言つたことは後々必要に応じて誰かが語るであろう事だ。これ以上の事には触れないでおこう。ちなみに、これらの事は半分以上忘れて構わない。薄々わかつてもらえれば、充分だと思つ。き

つと、この作者は細かい設定を物語に多く食いこませないからな。

「で、お前は何を一人で解説している?」

「と、こんな風に人の解説に割り込んでくる二ートは消えればいいのにと思つ」

「案外アドリブに強いな。そのせいで俺はかなり心を傷つけられたが」

二ートの脆い心の事なんて気遣う優しさは俺はない。

なるたけ人の目につかないようになると中庭の木の影で解説をしていた俺の配慮をどうしてくれる。

「で、何の用だローゼ。しばくぞ」

「ああ、いや。面白半分でしかけた罠にバカがひつかかってな。俺じゃ解き方がわからんから誰か適当に解いてもらおうと思ってな」

「なんだそんなことか。その罠ずっと放置しておいていいぞ」

しばくと言つたのに無視して用を言つこいつはもしかして大物なのだろうか。どっちにしろ俺はバカを助けるような優しい心を持ち合わせてはいけない。

「そうか。それなら無駄な手間が省けた。よし、そろそろ夕食の時間だらう。行くぞクレイズ」

「ん、ああ……て、そんなあつさり諦めていいのか?」

いくらなんでも自分が元凶なのにそれは被害者にとつてあまりにも理不尽だと思つ。まあ、クロムだからどうでもいいけど。実際、こいつつてどういう基準で行動してるんだろうな。

「ああ、他人の事を深く気にしてられるほど、俺は暇じゃない」

「アーティストはアートに対する想いをこめて書くんだ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3983z/>

---

夜桜こんちえると!!

2011年12月20日17時48分発行